

国際交流教育、教育の情報化と私立学校

山崎吉朗（日本私学教育研究所 専任研究員）

1. はじめに

標題をテーマにして、1. 国際交流教育の推進 2. 複言語教育の推進 3. e ラーニング教育の推進 4. 教育の情報化の推進の4点についての研究を行い、学会で発表し、論文集へ寄稿した。中身が多岐に渡っており紙幅が不足するので、本報告ではこの3つの研究の中心にあり、それぞれを結びつけている複言語教育研究会の発足から現在に至る活動、今後についてまとめる。個々の研究活動については最後の研究業績一覧をご覧ください。

そもそも英語以外の語学教育は私立学校にその端を発する。創立当初より英語以外の外国語を学習している私立学校が多く存在している。また、国の急務であるグローバル人材育成には英語以外の外国語も重要である。文科省が昨年2011年7月に発表した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」は「英語力向上」を目的とした提言であるが、その中でも「外国語には英語以外にも様々な言語が存在し、コミュニケーションの手段という意味ではそれぞれ重要である」と記されている。本研究会は真の意味でのグローバル人材育成につながる複言語教育の推進に向けての研究を進めている、その中心に私立学校が位置づけられる。

2. 現在の複言語教育研究会

簡単に現在の複言語教育研究会について記し

ておく。研究会のメンバーは6名だが、毎回ゲスト会員が加わって15名前後の大所帯になり、研究所の会議室ではいささか手狭な研究会に発展して来た。今後はさらに人数が増えていく見込みである。単に人が多いだけでなく、熱のこもった議論が続き、6時に始まる研究会が毎回10時ようやく終了するという熱心な会が続いている。後述するようにこの研究会が元になった大きなシンポジウムも続いている。

現在の参加者の専門言語は、フランス語、ドイツ語、英語、ポルトガル語、ロシア語といったヨーロッパ言語、中国語、韓国語というアジアの言語、外国人のための日本語、さらにはオーストラリア少数民族の言語と多岐に亘っている。スペイン語の担当者も加わる予定である。この研究会が元になったシンポジウム等が行われるのも、これだけいろいろな言語を横断的に結んでいる研究会が他にないからであろう。

これが現状である。

3. 発足に至るまでと研究会活動

3.1 最初の出会

現在筑波大学准教授の白山氏（ロシア語）が当時筆者の勤務していたカリタス女子中高を1998年に訪問したことに始まる。

白山氏はすでに中等教育におけるロシア語教育の調査は終えており、当時はさらに研究調査の範囲を広げ、中等教育における英語以外の教

育の調査を進めていた。その関係でカリタスに訪問調査に来られたのである。大学や高校の非常勤講師をしながら、全くの手弁当での調査であった。この研究成果は「日本の中等教育における英語以外の外国語教育（1999）」としてまとめられた。現在に至るまで、中等教育における英語以外の言語教育をまとめた文献としてこれを上回るものはない。それほど詳細に調べられている。今後これを越える文献を出すとするれば、この研究会以外にないであろう。

翌1999年に、白山氏を通して神谷氏（ドイツ語）を紹介され、当時筆者がコンピュータ教育の方で関わりを持っていた本研究所の山路氏と共に八王子にあった頃の研究所に神谷氏を招き、後に著者が「中等教育における英語以外の外国語教育についての調査分析（2001）」としてまとめることになる調査についての相談をした。

この白山（ロシア語）、神谷（ドイツ語）、山崎（フランス語）の3人のつながりが現在の研究会の元になっている。ただ、その後、2000年4月に、白山氏は筑波大学に、神谷先生は大阪学院大学に採用されて一時つながりはなくなる。再会するのは2006年に著者が本研究所に移ってからである。

3.2 調査資料集

再会のきっかけは本研究所が毎年刊行している調査資料集を担当したことだった。テーマを「英語以外の語学教育」としてよいことになり、協力者、執筆者を探すことになった。2006年11月である。

神谷氏、白山氏の協力を仰ぐことはすぐに決め、さらにアジア系の言語も必要であると考えていたところに次の出会いがあった。11月の外国語教育学会である。日本大学本間氏（中国語）の発表の中に高校での中国語教育についての言及があった。すぐに執筆を依頼したところ、最

初は別の専門家を紹介されたのだが、最終的には日本大学同僚の福木氏と共に寄稿してくれることになった。

白山氏から関東国際高校の黒澤氏（韓国語）を紹介され、韓国語の寄稿も決まった。関東国際高校とのつながりはeラーニング研究にもつながっており、今年度の「多言語eラーニングの普及と有効性検証—英語以外の外国語教育の推進をめざして—（2012）」の中でも大きく扱っている。さらには英語の国際交流グループに韓国の学校を紹介するという点でもつながっている。

当時の本研究所所長の故山岸駿介氏に「刊行のことば」として次のように書いて頂いた。

「英語以外の外国語に関心のない人だと、手にとってみることをさえないかもしれません。大学でさえ、英語以外の外国語を履修する学生がどんどん減り、教える教員も減らされているという時期に、中学、高校において、「英語以外の語学教育」をどうするか、何を教育すればいいのか・・・語学教育の重要な方向を見つけ、力をつけようという、ドン・キホーテのような報告書だからです。」

「教養書でもあると同時に、本書に刺激されて、「英語以外の外国語」の教育を取り入れ、中学生、高校生の関心をその方向に向けさせてくれるかもしれない実践の書になることも期待できます。この一冊の本が、私立学校だけでなく、全国の中学、高校に、いい影響を及ぼしてほしい。心からそう願っています。」

まさに、「ドン・キホーテ」の試みを進めている。

3.3 多言語教育研究会の発足

「今回の調査資料集が、打ち上げ花火のように一度で終わるのではなく、連続した動きのスタートとなるように願って、まえがきとしたい。」

と書いたように、次の2007年度に会は発足した。2007年5月25日に第1回目の会合を本研究所で行った。以下、敬称略で書くが、神谷（ドイツ語）、白山（ロシア語）、本間（中国語）、水林（フランス語）、櫻木（フランス語）、山崎（フランス語）の6名が第1回目の出席者である。その時の感想として、「話題が多岐に亘り、第1回目で3回くらい会議したような幅広い内容が出ました。どんどん輪を広げて、世間を動かすつもりで頑張っていきたいと思います。」と記している。次に示すように、発足以来の4年間の動きは「どんどん輪を広げて、世間を動かすつもり」という大風呂敷を徐々に実現していると言える。

3.4 2冊目の調査資料集

翌年度も調査資料集を担当することになり、調査資料集244「キャリアデザインにつながる多言語教育」を作成した。

この2冊の資料集は研究資料集としても引用され、現在の研究会の活動の原点となっている。

3.5 複言語教育研究会

翌2008年には、黒澤氏の紹介で国際文化フォーラムを筆者が訪れ、当時の中野事務局長、現在の水口事務局長も参加することになった。一方、後述の免許状更新講習の予備講習に際して、藤井氏（中国語）も加入、さらに以前から知り合いだった島田氏（フランス語）も加わり現在の原形ができあがった。

なお、2009年からは多言語教育から複言語教育に名前を改めた。多言語は移民社会の中での複数の言語共存の意味で使用されることが増え、複数の学習言語を学ぶことを示す場合は複言語という、ヨーロッパ共通参照枠 CEFR で示されたことばが用いられることが多くなったので会の名称を変更したのである。

4. 外の活動への波及

この研究会から派生したシンポジウムや学会発表などがいくつもある。以下に列挙する。

2008年

教員免許状更新講習（以下更新講習）で多言語教育を扱った。2008年の予備講習では、それぞれ独立して、フランス語、ドイツ語、韓国語、中国語の更新講習を研究会のメンバーを中心に実施した。2009年に正式に始まった更新講習では、選択領域18時間「多言語教育」教員免許状更新講習を、山崎（フランス語）、神谷（ドイツ語）、本間（中国語）の3名で実施し、島田（フランス語）のお手伝いを頂いた。2010年度は本研究所全体で更新講習を中止したので多言語教育講習も実施しなかったが、昨年度から再開し、多言語教育講習も縮小した形で実施した。

この講習を含めた全国が多言語教育に関する教員免許状更新講習について、2010年には、山崎、本間、神谷の「多言語教員免許状更新講習の現状と問題点」が研究ノートとして査読を通り、外国語教育研究第13号（外国語教育学会）に掲載された。実施しなかった2010年度も研究会誌に、本間、神谷の2名が、「平成22年度多言語教員免許状更新講習の開設について」という論文をまとめている。今年度についても上記外国語教育学会に投稿する。外国語教育学会では貴重な資料だと評価を受けている。

2009年

7月に開催された国際シンポジウム「東アジアの中等教育におけるフランス語（於早稲田大学国際会議場井深大ホール）」の企画段階から山崎が加わり、当日は山崎司会のセッションで、藤井（中国語）、黒澤（韓国語）が発表し、他のセッションで神谷（ドイツ語）が発表した。このシンポジウムでは、2010年5月に「いかに21世紀複言語能力を育てるか（朝日出版社）」を刊

行し、上記4名が寄稿した。また筆者は全体の編集にも関わっている。

2010年

6月に開催された日本言語政策学会第12回大会「多文化・多言語社会の到来ー多言語教育の回避?」ー国家戦略としての言語施策を考える(2)ー(於関西大学)でのシンポジウム「複言語主義教育とその政策ー日本における展望ー」で筆者がパネリストの一人となった

12月に開催された筑波大学外国語センター主催公開シンポジウム「今大学に求められている外国語教育とは何か?ー中等教育における多様な外国語教育の取り組みから見えてくるものー」で、臼山(ロシア語)の司会進行の下、山崎(フランス語)、藤井(中国語)、黒澤(韓国語)、神谷(ドイツ語)、本間(中国語)、保坂(日本語)、島田(フランス語)、栢田(英語)、水口(中国語、韓国語)が報告者及び共同討議者として参加した。

2011年

6月に開催される日本言語政策学会のシンポジウムには、山崎(フランス語)、臼山(ロシア語)が参加依頼を受けていたのだが、残念ながら大震災の影響で学会そのものが中止となった。

2012年

3月3日に実施されたシンポジウム「未来(あす)を生き抜くための外国語教育に挑む」企画の中心に山崎(フランス語)、臼山(ロシア語)、神谷(ドイツ語)、藤井(中国語)がいた。大きな企画で今後の複言語教育推進につながっていくと考えている。詳しくは次年度報告する。

4.1 研究会誌発行

昨年度(2011年度)からは研究会誌「多言語・複言語教育研究」を刊行している。ISSNの番号も取得し、多くの研究者、関係者に配布している。つい先日も国際交流基金の図書館に保管

するという嬉しい連絡があった。なお、先ほど書いたように会の名称は複言語教育研究会と変更したが、研究会のメンバーには日本語教育の専門家もおり、移民問題も研究会では扱っているので多言語、複言語の2つを並記することにした。

5. 今 後

これまでは自然発生的にいろいろな学会からの依頼に応じる形だったが、今度は一歩進めて、いろいろな言語の学会を結びつけた新しい企画を考えていきたいと考えている。複言語教育の進展に少しでも貢献していきたい。最初に述べたようにその中心に私学があるようにしたい。

本年度研究業績一覧

- 1 書籍
 - ・教育の最新事情(共著)、朝日出版社、2011
 - ・教職の充実のための実践講座(共著)、同上
- 2 研究会誌発行
 - ・多言語・複言語教育研究第1号 Journal of Multilingual and Plurilingual Education Vol. 1 日本私学教育研究所、2011
- 3 査読論文
 - ・多言語 e ラーニングの普及と有効性検証ー英語以外の外国語教育の推進をめざしてー、e-Learning 教育、e-Learning 教育学会、2012
- 4 書評
 - ・『マルチ言語宣言 なぜ英語以外の外国語を学ぶのか(大木允・西山教行編)京都大学学術出版会』、新英語教育、2月号、2012
 - ・『日本語から考える!フランス語の表現(佐藤康、山田敏弘)白水社』、外国語教育研究14、外国語教育学会、2011
- 5 学会発表
 - ・情報機器活用を目的とした多人数授業の授業設計、日本教育工学会全国大会(首都大学)、2011
 - ・フランス語教育の現状と展望ーアンケート調査結果に基づいてー、外国語教育学会全国大会(東京外国語大学)、2011
 - ・多言語教育講習の動向と問題点、外国語教育学会全国大会(東京外国語大学)、2011
 - ・教員免許状更新講習の現状と今後の方向性、Rencontres pédagogiques du Kansai(大阪アリアンスフランセーズ)、2012